

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 四 第 卷 一 十 第

論 說

農業社會主義論(一)……………法學博士 河田 嗣郎

累進課税の弱點に就きて……………法學博士 神戶 正雄

支那古來の限田說……………文學士 小島 祐馬

價值論上のリカアドとマルクス(一)……………經濟學士 堀 經夫

人格主義の立場に於ける經濟と人生の考察(一・完)……………法學士 石川 興二

時事問題

排日問題に就きて……………法學博士 神戶 正雄

我海運政策に對する國民の反省……………法學博士 戸田 海市

雜 錄

三種の「資本論」邦譯……………法學博士 河 上 肇

世界戰爭と人口の變動……………法學士 汐見 三郎

朝鮮干瀉地利用論……………經濟學士 三田村 一郎

新著紹介……………法學士 汐見 三郎

世界戦争と人口の變動

汐見三郎

世界戦争は巨額の財を費し、無数の人命を犠牲に供して漸く終を告げた。世界戦争の齎したる人口の變動は、戦費の問題と共に、否其よりも優るとも劣る事無き、重大なる研究題目である。

最近入手したる本年三月刊行の Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. 114. Bd. (III. Folge 59. Bd.) Heft 3. には、戦争中の世界人口

の變動に關し、極めて興味深き數字を發表してゐる。原材料は Christian Döring, Bevölkerungs-bewegung im Weltkrieg (Bulletin der Studien-gesellschaft für soziale Folgen des Krieges) に存し、該誌は夫れを轉載したのである。是が簡單なる紹介を試みて置かう。

順序を追ひ、先づ歐洲主要諸國の人口全體及び其男女別割合の變動を述べ、次に歐洲全部に及ぼし、最後に全世界が蒙りたる人命の損失の總數を觀察する事とした。尙本文には絶對數の

第一表 戦時中に於ける人口の變動

國名	大正二年末人口		大正八年度人口		戦争による損害		戦争無かりし場合を假想しての大正八年度人口	
	實數	千分數	實數	千分數	實數	千分數	實數	千分數
獨逸	74,000,000	1,000	74,400,000	1,000	74,000,000	1,000	74,000,000	1,000
英吉利	44,000,000	1,000	44,000,000	1,000	44,000,000	1,000	44,000,000	1,000
佛蘭西	39,000,000	1,000	39,000,000	1,000	39,000,000	1,000	39,000,000	1,000
伊太利	34,000,000	1,000	34,000,000	1,000	34,000,000	1,000	34,000,000	1,000
白耳義	24,000,000	1,000	24,000,000	1,000	24,000,000	1,000	24,000,000	1,000
勃利	14,000,000	1,000	14,000,000	1,000	14,000,000	1,000	14,000,000	1,000
羅馬尼	14,000,000	1,000	14,000,000	1,000	14,000,000	1,000	14,000,000	1,000

み掲げられ比較する上に於て不便の點が少くないから、凡て相對數を計算附記して其欠點を補つた。

二

Döring は、歐洲の主要國として獨逸、奥匈、英吉利、佛蘭西、伊太利、白耳義、勃利、羅馬尼、塞比維、歐露及波蘭の十國を擇び、戦前大正二年末の人口と戦後大正八年の人口とを比較對照して、次の結果を得たのである。

戦争無かりし場合を假想しての大正八年度人口

戰時中歐洲の主要諸國は、大正二年末に比し、
 少くとも四〇%、多き國は三五五%、平均八八
 %の人命を喪つた譯である。

人口減少の内譯を其原因によつて區別する
 と、次の如くである。

第三表 戰時中に於ける人口減少の原因別

國名	出生減少			死亡増加			戦死			戦争による損害計		
	實數	千分數	順位	實數	千分數	順位	實數	千分數	順位	實數	千分數	順位
獨逸	2,200,000	5.1%	第一	2,200,000	5.1%	第一	2,200,000	5.1%	第一	2,200,000	5.1%	第一
英吉利	1,800,000	4.5%	第二	1,800,000	4.5%	第二	1,800,000	4.5%	第二	1,800,000	4.5%	第二
佛蘭西	1,500,000	3.8%	第三	1,500,000	3.8%	第三	1,500,000	3.8%	第三	1,500,000	3.8%	第三
伊太利	1,400,000	3.5%	第四	1,400,000	3.5%	第四	1,400,000	3.5%	第四	1,400,000	3.5%	第四
白耳義	1,300,000	3.3%	第五	1,300,000	3.3%	第五	1,300,000	3.3%	第五	1,300,000	3.3%	第五
勃牙利	1,200,000	3.0%	第六	1,200,000	3.0%	第六	1,200,000	3.0%	第六	1,200,000	3.0%	第六
羅馬尼	1,100,000	2.8%	第七	1,100,000	2.8%	第七	1,100,000	2.8%	第七	1,100,000	2.8%	第七
塞比維	1,000,000	2.5%	第八	1,000,000	2.5%	第八	1,000,000	2.5%	第八	1,000,000	2.5%	第八
歐露及波蘭	1,000,000	2.5%	第九	1,000,000	2.5%	第九	1,000,000	2.5%	第九	1,000,000	2.5%	第九
計	10,000,000	2.5%	第十	10,000,000	2.5%	第十	10,000,000	2.5%	第十	10,000,000	2.5%	第十

第一表と第二表とを對照して考ふるに、以上の諸國は、戦争なかりせば、今日よりも約三千五百萬人多くの人口を擁してゐる筈である。此三千五百萬人の損失の中、約二千萬人は出産減少、約千五百萬人は死亡率増加に歸する事が出来る。而して戦場に斃れた者は實に千萬人の多きに上るのである。

三

前掲十箇國の住民の數は、大正二年の四億百萬人より大正八年の三億八千九百萬人に減少した。此三億八千九百萬人の中一億八千七百萬人は男子二億二百萬人は女子である。女子の數は遙に男子を凌駕してゐる。

人口の男女別割合の變化を示す爲めに、男子千人に對し女子幾人の割合なりやを千分數に計算し、次の表を得たのである。

第三表 男子に對する女子の割合

獨逸	1,011%	第五	1,025%	第五	突	第三	大正二年	大正八年	兩者の差
							千分數 同上	千分數 同上	千分數 同上
獨逸	1,011%	第五	1,025%	第五	突	第三	大正二年	大正八年	兩者の差
							千分數 同上	千分數 同上	千分數 同上

澳匈	1,027%	第四	1,052%	第四	空	第四
英吉利	1,027%	第一	1,028%	第三	五	第九
佛蘭西	1,036%	第三	1,130%	第二	六	第二
伊太利	1,027%	第二	1,028%	第六	三	第七
白耳義	1,027%	第七	1,028%	第八	三	第八
勃牙利	925%	第九	925%	第十	三	第八
羅馬尼	925%	第八	1,026%	第九	四	第五
塞比維	925%	第十	1,235%	第一	四	第一
歐露及波蘭	1,010%	第六	1,020%	第七	四	第六
計	1,010%		1,020%		五	

上記十箇國に於ては、女子が男子を超過せる數は大正二年の五百二十萬人より大正八年の千五百億萬人となり、正しく三倍してゐる。就中戦前歐洲の男子超過國の實例として引用せられた塞比維が、今や歐洲第一の女子超過國と化するに至つては、をざるに戦禍の甚しきを想はしむるではないか。

更に徴兵年齢階級即ち十九才以上四十五才以下の男女につき其割合を調べると、戦争の影響の特に著しき事が窺はれる。獨逸、澳匈、英吉利、佛蘭西、伊太利の五國に於て男子に對し女

子の占むる割合を千分數に精密に算定し、興味ある數字を得た。

第四表 徴兵年齢階級男子に對する同年齡階級女子の割合

	大正二年		大正八年		兩者の差
	千分數	順位	千分數	順位	
獨逸	1,005%	第五	1,120%	第三	115%
奧匈	1,006%	第二	1,130%	第一	124%
英吉利	1,006%	第二	1,135%	第四	129%
佛蘭西	1,017%	第四	1,130%	第一	113%
伊太利	1,009%	第一	1,136%	第二	127%
計	1,004%		1,105%		101%

四

以上は歐洲の一部分の數字に過ぎない。例へば葡萄牙、希臘、黒山等の小國は數へられてゐないのである、勿論此等の諸國は上記の十箇國に比すると戰爭にたづさはる事は少くあつたが、而も比較的著しき損害を蒙つてゐるのである。次に歐洲土耳其も之に加へねばならぬ。又ブイランドも大正七年には慘憺たる内亂によ

り多數の人命を失つた。尙其上に和蘭、丁抹、瑞典、諾威、瑞西の如き中立國も、種々の意味に於て、戰爭の影響を受けた。此等の諸國を考慮に入れると、歐洲全部に於ける人命の損失は約三千五百五十萬人と計算せられる。

更に、世界全體の蒙りし損害に至つては、其數は一層増加するのである。第一に注意すべきは歐洲外の露領（西比利亞、高加索、中亞）であつて約五十萬人の戦死者を出だし、次に五十萬人の犠牲者を出した土耳其、波斯、英領の海外屬領及び植民地の二十五萬人以上の損失、阿弗利加の佛領植民地、獨領植民地、北米合衆國の死者五萬二千人等を數へ上げ、最後に日本の僅少なる戦死者をも計算に入れる事となると、其數は益々増大する一方である。かくて *Domingo* は人命の損失全部を四千萬人と見積り、其中千二百萬人を戦死者と看做してゐる。

以上が *Domingo* の説の大要である。勿論此等の統計數字が學問上悉く皆信據するに足るや否やは大なる疑問である。然し煩を厭はず幾多の

材料を蒐集し此研究を完成したる其勞は大に多
とせねばならぬ次第である。此等の試が捨石と
なつて續々立派な研究が起り、古今未嘗有の世
界大戰爭中の人口の異動の狀態を巨細にするを
得ば、筆者の本懐も達せられる事であらう。